



## 優秀賞

## お米と「真心」

羽後町立高瀬中学校 二年 齋 藤 敬太郎

僕は、お米が大好きです。理由は、お米そのものの味や食感が好きだというのがありますが、一緒に食べるおかずまで、おいしく感じさせてくれるからです。さらに、作ってくれた人の「真心」までこもっているから、ますますおいしく感じられます。

僕の祖父母は農業をやっていて、米作りをしています。僕は小さかった頃、家の前の田んぼで働いている祖父母の姿を見ながら「おいしいんたちは、何を作ってるんだろう」と不思議に思っていました。目の前に、たくさん生えている「草」が、まさか僕の大好物である「お米」になるとは思ってもいなかっただけです。しかし、その「草」は次第に背が高くなり、穂がうなだれて「お米」が実りました。

僕は最初、お米も他の野菜のように、種をまいたら、そこで大きくなって収穫できるのだと思っていました。しかし、毎日食卓に出てくる真っ白いごはんのルーツは、そんなに単純なものではありませんでした。小学校になると、僕は「田植え」や「稲刈り」などの作業を手伝うようになりました。すると、どれだけたくさんの手間暇をかけて、お米が作られているかが分かってきました。「米」という字を分解すると「八十八」となります。この数字くらいにたくさんのお米の作業を経て、お米は作られているのだそうです。祖父母が、これだけ丹精込めて育ててくれたのです。まづい訳がありません。お米のおいしさの秘密は、「じいちゃんとおばあちゃんのお米」だと僕は思いました。

ごはんの食べ方は様々あります。チャーハン、丼物、寿司、きりたんぽなど、どれもおいしいですが、中でも僕が一番好きなのは、「カレーライス」です。カレーの辛さと、ごはんの相性は抜

群です。お腹を空かせて帰った時に、玄関の戸を開けたとたん、カレーの香りがすると、思わず「よっしゃー」と言いたくなります。しかも母が作るカレーは絶品です。

僕は料理をするのが好きで、カレーも何度か作ったことがあります。いつか、母よりも美味しいカレーを作ってみたい、そう思っていた僕は、母に勝負を挑みました。母に味見をしてみたい、「おいしい」と言ってもらったら、僕の勝ちという勝負です。母の味を思い浮かべ、そこに自分なりの工夫をして、僕のオリジナルカレーが完成しました。味見をした母のコメントは、「うん、おいしい!」

その瞬間、僕は勝ったと思いましたが、

「でも、まだまだだね。お母さんと比べたら遥かに遠いね。」と言われてしまいました。でもまあ、そうだろうなと、僕は降参しました。一口食べて、

「うまいけど、母ちゃんにはやっぱり遠いや。」  
僕がそう言うと、

「当たり前だろ。」  
母は、そう言って笑いました。母のカレーは、なぜそんなにおいしいのでしょうか。それは、料理のベテランだということに加えて「母の真心」が隠し味で入っているからだと思いました。祖母の作ったお米を炊いて、母の作ったカレールーをかけたカレーライスは、最高のごちそうです。

お米はシンプルな味だからこそ、米作りや料理に携わった人の心遣いまでも、味として現れる食べ物なのかも知れません。いつか僕にも、家族を料理で喜ばせることができる日が来ればいいな、と思うようになりました。

そして今、

「料理人になりたい」

というのが、僕の夢です。丹精込めて育てられた食材の味を、真心を込めて引き出せる料理人を目指したい、そんな夢がもてたのは、おいしい「お米」と、家族の「真心」のお陰だと、感謝しています。